

平成25年度 多賀町立博物館

研究発表会

Taga Town Museum Research Meeting 2013-2014

講演要旨集



多賀町内の水田周辺に生息しているツチガエル (*Rana rugosa*)

2014年3月2日

会場：あけぼのパーク多賀大会議室

平成 25 年度多賀町立博物館研究発表会

- ★発表時間は講演 15 分、質疑応答 5 分です。円滑な進行にご協力をお願いします。
- ★会場および館内は禁煙です。喫煙は屋外の喫煙スペースをご利用ください。
- ★会場に設置してある機器には触れないようお願いします。
- ★お茶をご用意しておりますので、休息時にご利用ください。

発表演題

13:15～13:35

多賀町の木「杉」の魅力を知る

中川 信子（多賀植物観察の会）

13:35～13:55

植物図鑑に載っていないけれど普通
に見られる雑種

村長 昭義（愛荘町立秦荘東小学校）

13:55～14:15

滋賀県の外来植物

稗田 真也（滋賀県立大学環境科学部）

14:15～14:35

川を越えたブラナリア

～遺伝的グループの分布から見た考察～

手良村 知功（滋賀県立彦根東高等学校 SS 部
生物班）

14:35～14:55

カエルの食性調査の教材化

～カエルのごはんから見える環境～

部 優子（多賀町立博物館）

14:55～15:15

休憩（20 分）

15:15～15:35

多賀鉱山鍾乳洞鍾乳石の成長縞観察
～多賀の古気候復元へ向けて～

久持 亮（京都大学大学院理学研究科）

15:35～15:55

多賀町古代ソウ発掘プロジェクトの取
り組みについて

小早川 隆（多賀町立博物館）

15:55～16:15

滋賀県多賀町四手の古琵琶湖層群から
産出した昆虫化石

八尋 克郎（滋賀県立琵琶湖博物館）・林 成多
（ホシザキグリーン財団）

16:15～16:35

多賀町四手産貝化石の意義について

田村幹夫（堆積環境研究会）

16:35～16:55

多賀町古代ソウ発掘プロジェクト
第 1 次発掘で得られた脊椎動物化石

阿部勇治（多賀町立博物館）・多賀町古代ソウ
発掘プロジェクト脊椎動物化石グループ

多賀町立博物館

TAGA TOWN MUSEUM

〒522 - 0314 滋賀県犬上郡多賀町四手 976 - 2

TEL:0749 - 48 - 2077 FAX:0749 - 48 - 8055

http : //museum.tagatown.jp E-mail : museum@town.taga.lg.jp

多賀町の木「杉」の魅力を知る

中川 信子*

杉は、日本固有種であり、日本を代表する木です。多賀町の木でもあり、私たちにとって大切な木です。しかしながら、最近は花粉症の原因になるということで、悪者扱いされることが増えてきました。これは大変残念なことです。

杉は、縄文時代にはすでに日本人と付き合いがあり、長い歴史の中で、日本文化を育んできました。花粉症が問題になってきたのはごく最近のことです。

杉のことを知ることは、私たちの暮らしを考えることにつながります。杉の特徴や、杉がどのように人々に活用されてきたを紹介し、杉の魅力を再認識する機会にしたいと思います。

多賀町を代表する「日出杉」「地蔵杉」などの紹介や、杉とともに生育する植物も紹介します。手入れができていない杉の植林地には貴重な植物も生育しています。

杉の活用は、多賀の豊かな自然環境を守ることににつながります。多賀町の木「杉」と多賀町の花「ササユリ」が生育する環境をみんなで守っていきましょう。

スギ（杉・枅）

スギ属ヒノキ科 （スギ科からヒノキ科に変更）

学名： *Cryptomeria japonica* クリプトメリア ジャポニカ

（隠れた日本の財産）

分布：本州、四国、九州（屋久島まで） 日本固有

生育地：山地の沢沿いに多いが、岩上や湿原の周辺などにも生える。ふだん目にするものは人工的に植栽されたもの。ヒノキ林に比べて杉の人工林はほかの植物が育ちやすい。林内にはコクサギやウリノキ、バイカウツギなど低木が見られ、エビネ、サイハイラン、ヤマルリソウといった草本も多い。

（山溪ハンディ図鑑5樹に咲く花）

* 多賀植物観察の会

植物図鑑には載っていないけれど普通に見られる「雑種」

村長 昭義*

「ハイブリッド haibrid」という言葉は、ハイブリッドカーのように2つの異なる動力源(エンジンとモーター)を組み合わせた自動車に冠せられることが多いが、生物学的には「交雑種いわゆる雑種」を示す言葉である。一般にはイノブタ(イノシシ × ブタ)やアイガモ(マガモ × アヒル)のような雑種がよく知られている。

異なる種と種が交雑した場合、できた子(雑種第1代: F1)に生殖能力がない(不稔: 発芽できない種子)のが普通であるが、生殖能力(稔性: 発芽できる種子)をもつことがあり、その遺伝子は次世代へと受け継がれていき、「種」として扱われることがある。いわゆる「雑種起源の種」である。

「雑種起源の種」の例としては、トウカイコモウセンゴケ(*Drosera tokaiensis* 2n=60)が知られる。この種はモウセンゴケ(*D.rotundifolia* 2n=20)とコモウセンゴケ(*D.spatulata* 2n=40)との雑種と考えられている。このほか、シダ植物のキヨスミオオクジャクなども雑種起源の種である。

このように雑種起源のもので「種」として認められているものは、図鑑に掲載され、一般の人々に認知されるのであるが、種としては認められず単に「雑種」扱いされているものは図鑑に掲載されないため、一般に認知されることはほとんどない。したがって、雑種を種だと思い込んでいる場合も少なくない。本稿では、ごく普通に見られて、人知れず花を咲かせているこれら「雑種」たちに焦点をあててみたい。

アイノコヒルガオ *Calystegia hederacea* × *japonica*

ヒルガオ(*Calystegia japonica*)とコヒルガオ(*Calystegia hederacea*)との雑種で、路傍や草地に普通。個体数はヒルガオやコヒルガオよりもはるかに多く、コヒルガオと誤認されていることが多い。



アイノコヒルガオ (滋賀県近江八幡市加茂町: 2012年7月10日)

* 愛荘町立秦荘東小学校

	ヒルガオ	アイノコヒルガオ	コヒルガオ
葉	葉耳は短く、葉の先端はとがらない。	葉耳は広く開出し、葉の先端はとがる	葉耳は広く開出し、葉の先端はとがる。
花の直径	5cm 以上	直径4～5cm	花の直径3～3.5cm
花の色	淡紅色（ピンク）	淡紅色（ピンク）	白色に近い淡紅色
小苞	鈍頭、縁は有毛。	鋭頭、縁は有毛	鋭頭、縁は無毛
花梗	翼がない	波状の翼がわずかにあるかあるいはない	波状の翼がある
染色体数	2n=22.	2n=22?	2n=22

草本類ではほかには、アイノコセンダングサ（コセンダングサ × コシロノセンダングサ）、アイノコカラムシ（仮称）（ナンバンカラムシ × カラムシ）などが見られる。

木本類ではアイノコフユイチゴが普通に見られる。

アイノコフユイチゴ (*Rubus* × *pseudhakonensis*)



がくに長い白毛あり



葉先は鋭尖頭

アイノコフユイチゴ （滋賀県米原市（旧山東町）村居田：2010年12月11日）

	フユイチゴ	アイノコフユイチゴ	ミヤマフユイチゴ
茎	刺がないか、まれに小 数の小さい刺あり 長い白毛あり	多数長い刺あり 長い白毛と短い白毛 あり	多数長い刺あり 長い白毛はなく、短い 白毛あり
葉	裂片は円頭～鈍頭	裂片は鈍頭～鋭尖頭	裂片は鋭頭～鋭尖頭
花序	腋性が多く、頂性は少 ない 3～10花	腋性～頂性 3～10花	頂性が多く、腋性は少 ない 5～13花
がく片	密着毛と多数長毛あ り	密着毛と多数長毛あ り	密着毛のみ、長毛なし

久米・鳴橋（1985）より

シダ類ではイヌワラビの仲間（*Anisocampium* 属）やイノデの仲間（*Polystichum* 属）が雑種を作りやすいことはよく知られているが、鈴鹿山麓でもっとも普通のシダ類の雑種としてはアイノコクマワラビがある。

アイノコクマワラビ（*Dryopteris* × *mituii* Seriz.）

クマワラビ（*D. lacera*）とオクマワラビ（*D. uniformis*）との雑種で、母種（親種）よりも普通。オクマワラビと誤認されていることが多い。



アイノコクマワラビ （米原市（旧山東町）市場：2010年12月29日）

	クマワラビ	アイノコクマワラ ビ	オクマワラビ
鱗片	淡茶色～茶褐色	茶褐色～黒褐色	黒褐色
胞子囊群のつき方	胞子囊群は葉身の 最上部につき、そ の部分縮小し枯 れる。	胞子囊群は葉身の 半分より上につく が、その部分は枯 れない。	胞子囊群は葉身の 半分より上につく が、その部分は枯 れない。
葉の表面の脈	くぼむ	くぼまない	くぼまない
葉身の幅	葉の幅は広く、20 ～30 cm	葉の幅が広く 20 ～30 cm あり、強 壮（雑種強勢）	葉の幅はせまく、 15～22cm
染色体数	2n=41	2n=123	2n=82
生育地	中間温帯から 冷温帯	暖温帯か ら中間温帯	暖温帯か ら中間温帯

— 参考文献 —

久米修・鳴橋直弘. 1985. フユイチゴ群植物 1. 香川県内の分布. 植物地理・分類研究, 33 (1): 21-26.

滋賀県の外来植物

稗田 真也*

滋賀県の外来植物には、ナガエツルノゲイトウ（ヒユ科）やオオバナミズキンバイ（アカバナ科）のように繁殖力旺盛で社会問題になりつつある侵略的外来種がある。その一方で、現在のところ個体数が少ないために危険性が顕在化していない種も多い。

筆者は滋賀県に侵入している外来植物を把握する目的で、2011年度から県内で採集調査を行ってきた。筆者は滋賀県新産帰化植物と思われる種を15種ほど採集した。外来植物が外国から港湾に直接導入されることがなく、侵入するリスクが比較的低いと考えられる滋賀県でも、様々な人間活動によって外来種がもたらされている。一般的に、園芸種やアクアリウムプランツのような“栽培植物”は、人が手をかけないと生きていけないという印象がある。しかし、前述のナガエツルノゲイトウやオオバナミズキンバイのように鑑賞用やアクアリウムプランツとして利用されていた水草が野外で大繁茂している事例がある。園芸種のオオキンケイギク（キク科）は、現在では県内各地で野生化しており、大群落も見られる。また、ウスベニカノコソウ（オミナエシ科）のように路面間隙雑草の性質を持ち、アスファルトの割れ目や石垣に逸出して生育できる園芸種もある（図1）。本種は彦根市街地で分布が拡大しており、沖島では民家近くの至る所で観察することが出来る。ヤマモモソウ（アカバナ科）やシュッコンバーベナ（クマツツラ科）のようにワイルドフラワーによる“緑化”に伴って侵入したと考えられる種も採集した。ここまで紹介した維管束植物については観察者が多いため外来種の侵入に気付きやすいが、コケ植物でも侵入事例が見つかっている。筆者は、ミカツキゼニゴケ（ミカツキゼニゴケ科）（図2）を滋賀植物同好会の例会中に大津市で発見しており、その後も県内数箇所を確認した。園芸用土起源で侵入したと考えられる。

外来植物については定着が容易である一方、定着した種を駆除することにはしばしば非常に大きな困難が伴う。ここまでで紹介したナガエツルノゲイトウやオオバナミズキンバイについては現在も多大な労力や費用を要して駆除活動が行われている。こうしたことを回避するためにも、外来植物を侵入初期に発見・把握し、潜在的なリスクを認識しておくことが重要である。

* 滋賀県立大学環境科学部



図 1. ウスベニカノコソウ



図 2. ミカツキゼニゴケ

川を越えたプラナリア ～遺伝子レベルで見たナミウズムシの分布～

手良村 知功*

●はじめに

プラナリアとは扁形動物門渦虫綱の総称であるが、私たちはそのうちのナミウズムシに注目した研究をおこなってきた。その過程で、採取されるナミウズムシには地域ごとに形態的な変異があるように思えた。そのため、PCR 法を利用した遺伝子解析をもちいて、地域ごとに変異があるかを調べようとしたのが、この研究を行った動機である。なお、本研究は昨年8月に長崎県島原市で開催された全国高等学校総合文化祭自然科学部門において優秀賞を受賞したものである。

●結果

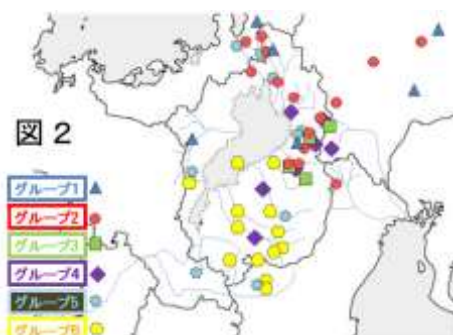
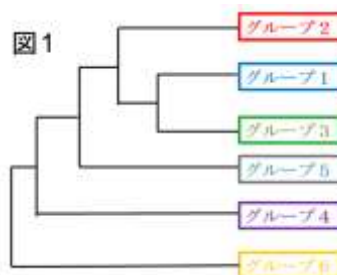
今回採取したナミウズムシの塩基配列を解析したものを系統樹(図1)に表すと、遺伝的な距離から主に6グループに分かれることが分かった。各グループ間の変異は約380塩基中50塩基程度である。

各グループの分布(図2)からグループ1,2,3,4はおもに滋賀県の北部を中心に岐阜県や福井県にかけて分布していた。グループ6は滋賀県南部から多く見つけたが、北部には見つからなかった。グループ5は滋賀県全域で見つけた。今回見つけた全てのグループが水系を越える分布をしていた。

今回の調査で最も多く見つけたグループ2とグループ6のナミウズムシに注目する。すると、グループ2は滋賀県北部、グループ6は滋賀県南部に分布しており、分布がきれいにわかれていた。

●考察

結果より、グループ2は滋賀県に東または北から移入してきたものだと考えられ、同様にグループ6も南から移入してきたのではないかと考えている。よって、私たちはこの二つのグループが、今最も勢いのあるグループであり、別々の方向から滋賀県に移入し、鉢合わせした結果、現在のような分布となったと考えている。このように、ナミウズムシの分布は、多くのグループが混在していることがわかった。このように多様なグループのナミウズムシが存在していることから、私達は、水生動物であるナミウズムシは地殻変動による川の流れの変化など大きな移動要因のほかに、動物に付着したり、陸上移動したりと、もっと頻繁に川と川を行き来しているのではないかと考えている。



* 滋賀県立彦根東高等学校 SS 部生物班

カエルの食性調査の教材化 ～カエルのごはんから見える環境～

部 優子*

一般の方に「食性調査」と言うと、専門的で難しい印象を持たれるかもしれない。ある程度の知識や経験がないと難しい部分もちろんあるが、実際はカエルの胃内容物を一つ一つ観察して、同定して、データを取って…という非常に単純で地道な作業である。この調査・研究を子ども向けにアレンジできないかと考え、今年度は夏休み自由研究応援講座と多賀の星空・自然を学ぶ会で実践した。

①夏休み自由研究応援講座「カエルの食べ物を調べてみよう」



事前にカエルの胃内容物を準備し、簡単なレクチャーの後、班ごとに材料を渡してどんなものを食べていたか調べてもらった。顕微鏡や図鑑を使いながら自力で同定できるようサポートし、講座の最後にそれぞれなんという生き物だったかを発表してもらい、全体の総括をした。

②多賀の星空・自然を学ぶ会「カエルのごはんから見える環境」



カエルの胃内容物の中からあらかじめ選んだものを顕微鏡で見られるように準備し、まずはそれぞれを観察してもらった。観察後、生き物の名前の答え合わせをし、どんな生態なのかを紹介した。単に食べていた生き物の名前を知るだけでなく、カエルの食性を調べる意味や、カエルと他の生き物・環境とのつながりについて解説した。

①は実習がメイン、②は話がメインとそれぞれタイプの異なる講座となったが、同じ材料を用いて実施した。カエルの胃内容物は70%エタノールで液浸標本にしてあり、繰り返し利用することが可能である。

今後は、小学校低学年・高学年、中学生、高校生…と段階に合わせたの対応もできるように、講座内容を教材化していきたい。また、今年度はトノサマガエルとツチガエルの胃内容物が中心となったので、種間比較ができるよう他の種についてもサンプル収集に努め、研究と教材づくりの両方を並行して行うことを目標とする。

* 多賀町立博物館

多賀鉱山鍾乳洞鍾乳石の成長縞観察 ～多賀の古気候復元に向けて～

久持 亮*

鍾乳石（石筍）を用いた古気候復元が中国やヨーロッパを中心に世界各地で行われている。しかし、日本での研究例はまだ少ない。本研究では、滋賀県犬上郡多賀町の多賀鉱山で発見された鍾乳洞で採取された5つの石筍サンプルを用いて、古気候復元を目的とした石筍の成長縞の観察を行った。

石筍とは洞窟の天井から落ちる滴下水によって、洞窟床面から上に成長する鍾乳石の一種である。石筍を二つに切った断面をみると、成長縞が観察できる。成長縞にはいくつかの種類があるが、中には1年に1枚ずつ形成される縞（年縞）がある。年縞を持つ石筍は1年単位で年代を決定できるため、古気候復元に有用である。しかし、成長縞が年縞であるかどうかを確かめることは容易ではない。

本研究での各石筍の断面の薄片を顕微鏡で観察したところ、全ての石筍で成長縞が観察できた（図1）。蛍光顕微鏡で同様に観察を行ったところ成長縞は紫外線蛍光することから、成長縞は土壌起源の有機物によって形成されていると考えられる。縞の間隔は石筍ごとに、また同じ石筍でも観察する部分によって変化するが、数 μm ～数百 μm の範囲に収まる。今後、U-Th非平衡年代（放射性元素を用いた年代測定法の一つ）の結果や縞の特徴を細かく観察することで、年縞を特定できれば、1年単位の年代決定が期待できる。

また、石筍（ CaCO_3 ）に含まれる酸素同位体比の変動が、過去の降水量の変動と一致（逆相関）することが知られている。このことを利用して、将来的には多賀の過去数千年分の降水量の復元を目指したい。

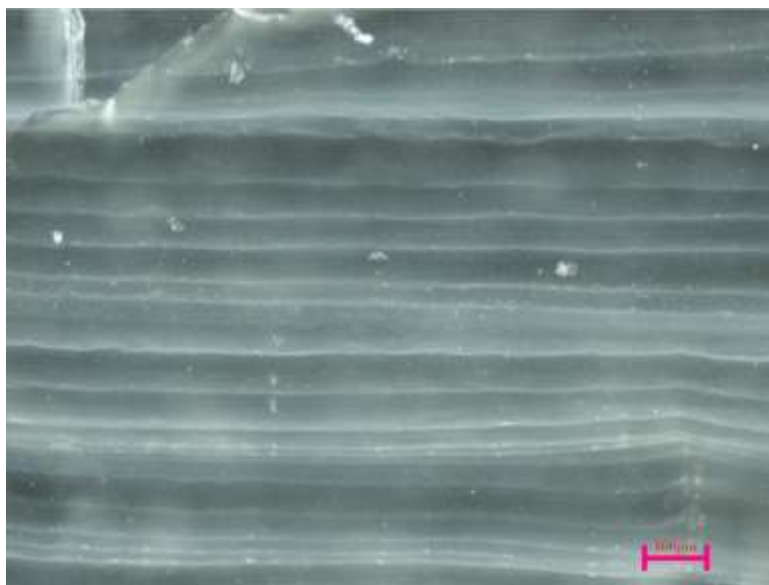


図1：多賀鉱山鍾乳洞の石筍にみられる成長縞

* 京都大学大学院理学研究科

「多賀町古代ゾウ発掘プロジェクト」の取組みについて

小早川 隆*

「多賀町古代ゾウ発掘プロジェクト」は、多賀町立博物館とアミンチュプロジェクトがアケボノゾウ発掘20周年を記念して始めた継続的な事業です。事業の目的は20年前の発掘では出来なかった2つの点を遂行することにあります。1つ目は地域の皆さんに発掘の楽しさや学ぶ喜びを体感していただくこと。2つ目は地層や化石の詳しい調査をすることです。このプロジェクトを通じて多賀町の自然環境の素晴らしさを再認識し、地域の博物館としての今後のあり方を考える機会になると考えています。

【多賀町生涯学習の中の博物館】



* 多賀町立博物館

滋賀県多賀町四手の古琵琶湖層群から産出した昆虫化石

八尋 克郎*・林 成多**

1 はじめに

今年は、平成5年（1993年）に多賀町四手においてアケボノゾウ全身骨格化石が発見されて20年目の年にあたる。この節目にあたり、「多賀町古代ゾウ発掘プロジェクト」という調査団が結成された。調査団は180万年前の多賀町地域、ひいては日本列島の環境変遷史を探ることを目指している。この調査団のなかで昆虫班のメンバーの一人として参加した。これまで古琵琶湖層群からの昆虫化石の記録は、わずか3例のみである（富永・昆虫化石研究グループ, 1993; Hayashi and Shiyake, 2002; 林, 2006）。今回、滋賀県多賀町四手部層から産出した昆虫化石について中間報告を行う。

2 発掘地の地層

発掘する地層は古琵琶湖層群と呼ばれている。古琵琶湖層群は、三重県伊賀・上野地域から滋賀県南部にかけて分布し、非海成の礫層・砂層・粘土層などからなる地層である。古琵琶湖層群の最も古い地層（約400万年前）は三重県上野市付近に分布する上野累層で、南から北へ向け8つの累層が年代順に分布している。こうしたことから、堆積盆が次第に形を変え北上し、現在の琵琶湖へとつながっているのではないかと考えられている。多賀町に分布している地層は、蒲生累層の上部と草津累層に相当し、琵琶湖の歴史の中ではほぼ中ごろ（約200万年前から170万年前）にあたる。

3 産出した昆虫化石

今回の調査で検討を行った昆虫化石は、グリッド3、4、5、10、14、15、19の7地点から産出した計26点で、いずれも甲虫目に属するものであった。産出した昆虫化石のうち、ハムシ科ネクイハムシ亜科は、アオヘリネクイハムシに比較される種 *Donacia (Donaciomima) sp. cf. versicolore* が18点で、グリッド3、4、14、15、19から産出した。本種は旧北区に広く分布する現生種で、日本では絶滅した種である。本種と同種と見られる化石は、日本各地の鮮新世（約400～300万年前）から中期更新世（約74～14万年前）の地層から見つまっているが（八尋ら, 2001; 林ら, 2003, 2005; Hayashi, 1999, 2000）、古琵琶湖層群からは初めて確認された。現生のアオヘリネクイハムシの生態から、浮葉植物が生えるような、ある程度水深のある水域であったことが推測される。

多賀町四手産貝化石の意義について

田村 幹夫*

意義の① 空白の時代を埋める手がかり

琵琶湖には約 60 種類の淡水貝が生息し、その約半数が固有種とされています。これらの貝が、いつ、どのような経過で琵琶湖に生息するようになったのかは、化石の研究によって知ることができます。

琵琶湖の周辺には、約 450 万年～40 万年前に堆積した古琵琶湖層群と呼ばれる地層があり、そこからは貝の化石が豊富に産出します。この貝化石の詳細な研究は 1970 年代末から始まり、1987 年に松岡敬二さんによってまとめられました。しかし、松岡さんが調査をした当時は、約 200 万年～100 万年前（蒲生層上部の時代～堅田層下部の時代）の貝化石が見つかる場所がほとんどなく、この期間が空白として残されていました。

多賀町四手の古琵琶湖層群は、蒲生層最上部～草津層に相当し、約 200 万年～150 万年前ごろのもので、ここから貝の化石が見つければ、松岡さんの研究の空白部を埋めるものとして期待されていました。

私たちは、1990 年～1993 年の琵琶湖東部中核工業団地の造成に際して調査を行い、カラスガイ、オグラヌマガイ類、ドブガイ類、イシガイ類、オオタニシ類、カワニナ類等の化石を大量に採集しました。これらの貝は現在の琵琶湖でもごく普通に見られるもので、現生種と化石種のつながりを解明する手がかりとなります。特にカラスガイは、古琵琶湖層群ではこの時代に初めて出現し、古琵琶湖水系に侵入してくると同時に爆発的に繁栄したことを物語っています。

意義の② 壊れた化石こそ雄弁

2013 年に始まった今回の調査では、貝化石の産出数はまだそれほど多くありません。採集できた貝の種類は 1990 年～1993 年の調査で得られたものと全く同じですが、産出状態には大きなちがひがあります。それは、貝化石の多くが、一部を欠損していたり、殻が細かく割れていたりしていることです。

殻が割れるのは、死後に大きな力が加えられたことが原因です。よく調べれば、その力の原因を知ることができるかも知れません。足跡化石との関係も、気になるところです。

割れてバラバラになった貝の化石は、発掘現場であまり大切にしてもらえません。でも、大むかしのできごとを知る手がかりとしては、きれいで完全な化石よりもずっとおもしろくて価値のあるものだと思います。

*堆積環境研究会

多賀町古代ゾウ発掘プロジェクト第1次発掘で得られた脊椎動物化石

阿部 勇治*・多賀町古代ゾウ発掘プロジェクト脊椎動物化石グループ**

滋賀県犬上郡多賀町四手から富之尾にかけての丘陵には、下部更新統の古琵琶湖層群が分布している。この地層からは、これまでにシカ類 (*Cervus* sp.) やアケボノゾウ (*Stegodon aurorae*)、ワニ (*Crocodylidae* gen. et. sp. indet.) など、多数の脊椎動物化石が産出しているが、継続して組織的な調査が行える状況ではなく、びわ湖東部中核工業団地の造成工事終了後は発掘調査などは行われていなかった。ところが2012年秋、滋賀鋳産(株)のご厚意によりかつてアケボノゾウ化石が発掘された地点の近傍で発掘調査が実施できることとなった。ここでは、第1次発掘で得られた脊椎動物化石を中心に、成果の概要について報告する。

発掘地の地層は、細粒砂～粘土によって構成され堆積構造に乏しい。直立樹幹や足跡化石も見られることから、増水時は水つきになるものの平常時は極めて浅い水域あるいは湿地のような環境であったと考えられる。脊椎動物化石を特に多く含んでいる層準は、四手火山灰層(フィッシュントラック年代: 1.8 ± 0.3 Ma) から約1m上位にあたる。これまでに、コイ科魚類の歯・骨、カメ類の縁骨板、シカ類の骨などが得られているが、いずれもバラバラで関節した状態の物や同一個体を構成していたと思われる物はない。一方、埋没過程で少しずつ破壊されていった産状を示す標本があることから、遺体が骨となってバラバラになった後、さらにそれなりに時間のかかった移動と分解を経て埋没した様子を考えることができる。

コイ科魚類については咽頭歯化石が多く得られており、形態的特徴から少なくとも3グループ(コイ亜科、アブラミス亜科?、カワヒラ亜科?)が含まれていると思われる。発掘地の地層も含まれる古琵琶湖層群蒲生層からは、これまで魚類化石はほとんど報告されていない。“古琵琶湖”における古魚類相の変遷を考えるうえで、得られた標本のより詳細な検討が重要である。

カメ類については、あまりに断片的過ぎるため分類学的位置づけは困難である。しかし、化石の表面には現生の水生(淡水)カメにもしばしばみられる膿症の痕跡と思われる窪みがあり、生息環境との関連を考えるうえで興味深い。

シカ類についても得られているのは断片的な体幹・体肢骨のみであり、分類学的な詳細は不明である。保存状態の良い距骨(右)について、1993年にアケボノゾウ発掘地点のすぐ隣で発見された1個体分の標本(♀)の物と比較したところ、形態、大きさともにほぼ一致していた。また、近位内側面には、現生ニホンジカには見られる小隆起が見られなかった。この小隆起は踵関節伸展時に脛骨を安定させるのに役立っていると考えられ、休息姿勢や運動様式などにおいて現生ニホンジカと相違があった可能性が示唆される。

*多賀町立博物館 **阿部勇治(多賀町立博物館)、小西省吾(甲賀市立みなくち子どもの森自然館)、高橋啓一(滋賀県立琵琶湖博物館)

平成25年度多賀町立博物館研究発表会 講演要旨集

発行 多賀町立博物館

〒522 - 0314 滋賀県犬上郡多賀町四手 976 - 2

TEL:0749 - 48 - 2077 FAX:0749 - 48 - 8055

<http://museum.taga.town.jp/>

E-mail: museum@town.taga.lg.jp

